

注意！

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制（農業使用基準等）等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

農作物技術情報 第7号 畑作物

発行日 平成21年 9月25日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ（電話 0197-68-4435）

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

大豆：10月中旬から大豆の収穫が始まります。収穫機械の調整・清掃や圃場の除草を行い、適期に収穫できるよう準備をすすめてみましょう。また、施設を利用して乾燥調製を行う場合は、あらかじめ連絡を取り合い、計画的に作業できるようにしましょう。

小麦：小麦の播種適期となっています。適期を逃さず確実に作業を行い、生育量の確保に努めましょう。圃場条件が整わず適期を逃した圃場では、播種量を増やし、条件の良い時を待って播種しましょう。

I 大豆

生育の様子：天候に恵まれ、順調に登熟しています。

1 収穫作業のまえに

除草

アメリカセンダングサなどの大型雑草は、収穫時に汚損粒の発生原因となるので、収穫前に取り除きましょう。

大豆畑で問題となっている雑草の種子は、湛水処理では死滅しないものが多く、一度多発するとブロックローテーションで水稻を作付けしても雑草が減ることはほとんどありません。雑草防除のポイントは、種子をほ場に落とさないことです。

コンバインの清掃

収穫作業の前には必ず清掃を実施し、作業に支障が出ないか確認しておきましょう。また、土をかき込んだ時など収穫作業中でもコンバインの清掃が必要となることがあるので、清掃のポイントを把握し、効率的に行えるようにしておきましょう。

乾燥・調整施設の確認

乾燥・調整施設を利用する場合には、その稼働計画について確認し、ほ場の様子を踏まえた上で、刈り取りの順番、収穫機械やオペレーターの確保等、準備をすすめてみましょう。

2 収穫

成熟期の判断

適期に収穫するためには、まず成熟期を知ることが必要となります。

成熟期は次の2つから判断します。

(1) ほ場のほとんどの株で、大部分の莢が熟色になっている

(2) 莢の中の子実が乾燥子実の形になっている

莢を振ってカラカラ音がするようになったら、数カ所で実際に莢をむいて確認します。

成熟期を確認したら、表1を参考に収穫作業に入ります。

表 1 成熟期からコンバイン収穫適期までの日数

品種	成熟期からコンバイン収穫適期までの日数		
	早限	晩限	収穫(適)期間
コスズ、すずほのか	7～10 日後	30 日後	20～23 日
ユキホマレ	7～10 日後	20～25 日後	10～18 日
スズカリ、ナンブシロメ	10 日後	20～25 日後	10～15 日
リュウホウ	10 日後	20 日後	10 日
青丸くん	10 日後	16 日後	6 日間前後

※「青丸くん」は刈り遅れると子実の色抜けが生じることから、直ちに刈り取れる体制を整えておき、収穫適期間になったら、一気に刈り取るようにする。

※「リュウホウ」はしわ粒が発生しやすいので、収穫適期になり次第、速やかに収穫すること。

コンバイン収穫のポイント

* 茎水分が 50%を超えると、こき胴でもまれ、汚損粒の発生原因となります。

- ・ 茎水分 50%以下の目安は、分枝が手でポキポキと折れるとき。
- ・ 周囲の株と違い、青々として残っている株は抜き取る。

* 損傷粒の発生は穀粒水分の影響を大きく受けます。

- ・ 穀粒水分が 20%以上と高い場合 → つぶれ粒を主体とする損傷粒が多くなる。
- ・ 穀粒水分が低い場合 → 裂傷や割れ豆などの損傷粒が増える。

* 収穫の時間帯は、茎葉がよく乾いた頃（晴れた日の午前 10 時過ぎ～午後 5 時頃まで）になります。

3 乾燥

子実水分が高いものを急速に乾燥させると、裂皮粒やしわ粒発生の原因となります。子実水分を均一に低減させるよう、送風温度等に留意しましょう。

(1) 乾燥初期の送風温度を低く（25℃程度に）おさえましょう。

(2) 送風湿度を下げすぎないようにしましょう。

(送風湿度 50%程度を下限值として、外気温湿度状態に応じて加温条件を設定。ただし、逆に大豆水分 20%程度で乾燥初期に湿度と温度を上げると蒸れが生じる場合があります)

被害粒発生のしくみ

被害粒のうち、裂皮粒やしわ粒は、子実肥大期での充実不足等、成熟期までに生理的に起きるものもあるが、乾燥時にも発生することが知られています。急速な乾燥を避け、土作り等で地力の維持に努めることも必要です。また、亀甲じわは、子実形成から収穫期前後までの乾燥・吸湿の過程で、皮と子実の収縮・伸長の繰り返しが原因でおきるので、刈り遅れは厳禁です。

裂皮粒・・・乾燥初期に表面水分のみが急激に低下した場合

＝ 送風温度が高く、乾いた空気を送った場合に多発！

しわ粒・・・同様に裂皮しない程度に変形した表皮に大豆中心部からの水分が移行し発生

大豆クリーナーの利用

コンバイン収穫における汚損粒の発生は、土砂に大豆の茎水分や雑草の汁液が混じったものが子実表面に固着することが主な原因です。

- ・ 汚損粒の発生要因・・・大豆の高い茎水分、雑草の多発、大豆の倒伏、不均一な培土、収穫時の土砂のかき込み、莢先熟、収穫時の長雨等

大豆クリーナーの使用については、処理方式が乾式・湿式の違いにより能率や品質への影響が異なるので、特徴をふまえた上で使用しましょう。

表2 大豆クリーナーの特徴

処理方式	主な特徴	処理量(kg/時)
乾式クリーナー	長所:効率的で高能率 短所:表面が研磨されるため長期貯蔵で加工適性が低下	600前後 (連続バッチ8分処理)
湿式クリーナー	長所:処理による加工適性の低下がみられない 短所:しわ粒発生のおそれあり、処理能力がやや低い	400~600 (水量300%1回処理)

II 小麦

小麦の播種適期を迎えています！

例年播種が遅れることによって生育量が足りないまま越冬する小麦ほ場が多く見受けられます。適期を逃さず作業を行い生育量の確保に努めましょう。圃場条件が整わず適期を逃した圃場では、播種量を増やし、条件の良い時を待って播種しましょう。

1 小麦の播種適期を迎えています

小麦をはじめ、畑作物にとって播種は非常に重要な作業です。適期を逃さず確実に播種を行い生育量を確保しましょう。

2 もしも適期を逃したら・・・播種時期が遅れたときの播種量の考え方

- ・ 各地区の播種晩限から1週間遅れるごとに10%播種量を増やします。
- ・ 県中南部で播種時期が11月に入るような場合は冬期播種に切り替え、12月以降に播種を行います。
- ・ 播種適期はできるだけ守るのが基本ですが、ほ場条件が良くない場合には作業を見合わせましょう。無理に播種しても発芽不良になるだけです。適期が過ぎてしまった場合は播種量を増やし、目標株立数が確保できるよう努めましょう。

表3 県内の地帯別播種適期

地帯	播種期(月.日)		適期日数 (日間)
	早限	晩限	
高標高地	9.15	9.25	11
県北部	9.15	9.30	16
県中部及び沿岸北部	9.20	10.5	16
県南部	9.25	10.20	26

表4 品種別の播種量と目標株立数

品 種 名	播種量(kg/10a)		目標株立数 (株/m ²)	千粒重 (g)
	ドリル播	全面全層播		
ナンブコムギ	4~6	5~8	75~120	41
ネバリゴシ	6~8	8~10	130~170	37
ゆきちから	6~8	8~10	120~160	39
コユキコムギ	6~8	8~10	120~160	41
キタカミコムギ	6~8	8~10	115~150	42
ファイバースノウ (大麦)	6~8	8~10	130~170	38

注) 播種粒数に対して株立率を80%(全面全層播は64%)として求めた。

3 冬期播種

冬期播種のイメージをまとめたものを表5に示しました。

冬期播種を行った小麦は、雪解け後から出芽を開始し、出穂・開花は1週間程度遅れるのが特徴です。播種量、基肥とも秋まき小麦よりも多くなります。

冬期播種は基本的に県中南部の排水条件が良好な圃場を想定しています。雪解けが遅かったり、排水条件が整わない圃場はおすすめできません。

表5 冬期播種栽培の技術体系

月	10	11			12			1	2	3			4			5			6	7		
旬		上	中	下	上	中	下			上	中	下	上	中	下	上	中	下		上	中	下
作業等	① ②	②			④⑤											⑦				⑧		
		←			←					←			←			←				←		
			③						出芽期				⑥			出穂期				成熟期		

作業の種類	作業内容	作業上の留意点
①排水対策	額縁明渠、心土破碎、圃場内排水溝	特に初年目転換田では、湿害防止のため排水対策は必ず実施する。砕土率向上のため排水の良好な圃場では、耕起・砕土は数回実施する。また、冬雑草抑草のため、耕起・砕土から播種までの間をあけすぎないこと。
②耕起 砕土	プラウ耕、ロータリー耕 ハロー耕	
③種子消毒	浸漬処理、塗沫処理	主に雪腐病を対象とする。
④施肥	播種同時側条施肥とし、施肥量は窒素成分で8~10kg/10aとする	施肥機構付きのドリルシーダーを使用する。リン酸・カリの施用は秋播慣行並みとする。追肥は基本的に不要。
⑤播種	播種期は12月（根雪前）とし、播種量は15kg/10a程度とする。	土壌表面が凍っている早朝に播種すると作業性がよい。播種深度は3~5cmを目標とする。
⑥除草剤散布	越冬直後に土壌処理剤、または雑草発生始期に広葉雑草対象の茎葉処理剤を散布する。	冬期播種栽培で使用できる除草剤の例 土壌処理剤：ダイロン水和剤 茎葉処理剤：ハーモニー75DF水和剤、アクチノール乳剤、バサグラン液剤
⑦殺菌剤散布	秋播慣行と同様に実施する。	出穂・開花期は秋播慣行よりも1週間程度遅いので、ステージをよく確認のうえ（特に赤かび病）散布する。
⑧収穫・乾燥	秋播慣行に準ずる。	成熟期は秋播慣行より2~7日遅い。

農作物技術情報第8号は10月29日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。
※ 発行時点での最新情報に基づき作成しております。
※ 発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

9月15日~11月15日は秋の農作業安全月間
急ぐより 家族の笑顔を大切に 想う心で ゆとりの仕事